帰国後 2 週間以内に提出してください　(厳守)　A4 用紙 4 枚以内

（海外）インターンシップ報告書　　2017 年 12 月 28 日提出

氏名	港 江利奈
所属	比較病理学教室
学年	博士課程 2 年
活動先名	国際獣疫事務局 アジア太平洋地域事務所、東京
期間 ①　（出発日―帰札日） ②　(インターンシップ実施開始日―終了日)	①　A：札幌 B：2017 年 12 月 17 日- 2017 年 12 月 19 日 ②　A：2017 年 10 月 02 日-10 月 05 日 B：2017 年 12 月 18 日- 2017 年 12 月 19 日

・活動目的及びインターンシップ先を選択した理由

【活動目的】

① 感染症から引き起こされる動物・人間・経済への脅威に対し、OIE や参加国がどのような協力体制を築いているのかを知る。

② 実社会での One Health 実現の際に、どのような課題が存在し、研究者としてどのような知識が求められるのかを知る。

③ OIE 東京オフィスでの研修を通して、仕事内容、求められる人材、勤務している方の具体的なキャリアパスを知り、自分のキャリアプラン形成の参考にする。

④ アジアで発生している感染症の発生状況や予防対策法に関する最新の知見を手に入れる。

【インターンシップ先の選択理由】

● 実社会において、感染症制御を行う際の課題や必要な知識を学ぶため

OIE は One Health の実現に重要な役割を果たしている国際機関であると考えている。OIE では感染症から引き起こされる動物・人間・経済への脅威に対し、各国と協力体制をとって、予防対策を行っている。「OIE がどのように他国/他機関と協力しているのか」あるいは「各国との協力体制の中で、OIE がどのような役割を担っているのか」などを直に知ることにより、学内の授業では学ぶことのできない、実社会で One Health を実現するための課題や必要とされる知識を学びたいと私は考えた。

● 国際機関と各国の間で、どのように連携をとっているのかを学ぶため

私は本年度の SaSSOH student session の企画に携わった。その中で、留学生と議論を重ねるうちに、異なる文化的背景を持つ人に自分の意見を正確に伝えた上で、企画の方向性を決定していくことに、私は難しさとやりがいを感じた。将来 One Health の実現に貢献するグローバルリーダーとなるためには、このようなコミュニケーショ

ン能力と決定力が必要である。そこで、本インターンに参加することで、OIE あるいは会議参加国の方々がどのように互いに連携をとり、物事を決定していくのかを学びたい、と考えた。

・活動内容・成果（2,000 字程度、活動内容が判る様な写真や図表を加えて下さい）

【 “OIE Regional Expert Group Meeting for the Control of Avian Influenza in Asia”における運営補助およびグループディスカッションへの参加】

活動内容

本会議へは、運営補助という形で参加した。主な仕事は会場の設営、note taking、タイムキーパーであった。

成果

各セッションの聴講を通して、以下の 2 点を学んだ。

1 点目は、アジア各国の HPAI の最新の発生状況である。また、島国か否か、HPAI が発生しているか否かなどの状況によって、最善の対策が異なるということを学ぶことができた。日本は島国であるため、国境問題を強く意識することは少ない。一方で、大半の他国は陸続きであり、HPAI 感染野生動物や違法な動物の輸入で鳥インフルエンザの感染が隣国から持ち込まれることがある。本会議への出席を通して、この問題に気づくことができたこと、その解決の難しさを学ぶことができたことは収穫だった。

2 点目は、「協力」の重要性である。インターンシップに参加する前は、「OIE と各国がどのように協力しているのか」という点にしか着目できていなかった。しかし、本会議への出席を通して、「OIE、FAO、WHO の協力体制」、「先進国と発展途上国の診断技術向上のための協力体制」について学ぶことができた。また、国境沿いでの感染症をどのようにして防ぐか、という点においては、隣国同士の信頼関係と協力体制が鍵であるように感じた。一国内に目を向けてみても、国によっては複数のセクターが鳥インフルエンザに関わっており、セクター間での協力体制をどのようにして築くか、が議論になっていた。感染症制御のためには技術面の向上のみならず、国際機関レベルから国内レベルの全ての段階で、強固な協力体制を築くことが重要であると感じた。すでに OIE は、FAO と共同で立ち上げた越境性感染症制御のためのプログラム(GF-TADs)、twinning program を通じた capacity building などの形で、参加国連携しながらアジア地域全体の診断技術向上に取り組んでいる。この取り組みを一過性のものに終わらせず、継続していく必要があると考えられる。

【OIE 東京オフィスにおける実地研修】

活動内容

実地研修では、OIE の具体的な活動について講義形式で学んだ。講義内容は以下に示す通りであった。

- WTO/SPS agreement and OIE codes
- OIE disease reporting system and information dissemination procedure
- The situation of transboundary animal diseases and OIE's regional activities for their control
- Animal welfare activities of the OIE
- One Health approach in the region
- Control of antimicrobial resistance
- Wrap-up of the internship

成果

本実地研修では、以下の 2 点を学んだ。

1 点目は、OIE の具体的な活動について学んだ。OIE は WTO/SPS agreement に基づき、動物衛生および人獣共通感染症の国際基準として OIE Codes/ Manuals を設定している。OIE code で規定されていない感染症については、各国が科学的な知見に基づきリスク評価を行い、検疫措置をとらねばならない。これにより、参加国の貿易保護目的の不当な衛生および植物防疫を防ぎつつ、疾病の蔓延を防ぐことが可能となる。また、OIE では各国の感染症発生状況について、WAHID を通じて提供しており、これに基づいて、参加国は感染症の予防対策をたてることができると考えられる。その他、OIE は FAO と共同で GF-TADs も行っている。GF-TADs の目的は、OIE と FAO の協力体制を強固なものにすることであり、参加国に「capacity building」および「その国にあった最適な感染症対策法」を提供している。特に越境性感染症の制御においては、二国間以上での協力体制を築かねばならない。その際に、第三者機関としての OIE/FAO のサポートは重要な役割を果たしていると考えられる。

2 点目は、One Health の実現や感染症制御に際し解決しなければならない課題について学んだ。特に私が興味を抱いたのは、アジア各国の現状である。本インターンシップでは、他の参加者が全て留学生だったため、彼らの母国での実際の状況も知ることができた。日本の公衆衛生環境は、他国と比較して恵まれている。一方で、アジアの大半の国では、予算不足、機器不足あるいは獣医に携わる人間の不足により、OIE が示すガイドラインを守りたくても守ることのできない国も存在する。留学生との議論を通じて、『アジア各国の獣医衛生向上のため、日本の獣医師がどのように協力すべきか』という課題について認識することができた。

・今後のキャリアパスを考える上でどのようにプラスになったか。

- 国際機関で働く上では、研究スキルに加えて、交渉力、他者と協力して物事を進めていく力あるいは各国の政治状況など、幅広い知識を身に着ける必要があると感じた。
- One Health という概念自体は良いものだが、一方で、アジアの大半の国では資金不足、技術不足などの問題が深刻である。この問題は OIE 単独では解決しがたい問題であり、他の国際機関との連携、あるいは国際機関と民間企業との連携などが解決策になるように感じた。私自身も、One Health の実現に固執するのではなく、まずは各国の利益を最大限に配慮しつつ、様々な関係機関と連携して、問題を解決していくような研究者になりたいと考えるようになった。
- OIE の職員の方々は「公共機関、他の国際機関で働いた経験が、各国との交渉や協力の際に役立った」と話していた。また、国際機関へのインターンシッププログラムも紹介して頂いた。これらの情報を自分のキャリアプランを考える際の参考にしたい。

・後輩へのアドバイス

国際機関でのキャリア、とくに発展途上国を支援するような仕事をしたい、と考えている方には、是非、『自分と同年代の途上国出身の人がいる環境でのインターンシップ』をお勧めします。これにより、国際機関の目指す理想と、途上国での現状の違いを肌で感じることができ、「自分がどのようにして途上国を支援したいのか」についてのヒントを得ることができると思います。

また、国際機関で働くには、職員さんとのコネクションが重要になります。そのコネクションを作る意味でも、国際機関へのインターンは有効であるように思います。

指導教員確認欄	指導教員所属・職・氏名

※１　電子媒体を国際連携推進室・リーディング大学院担当に提出して下さい。
※２　インターンシップ先の担当者が活動内容を証明した文書（署名入り）を提出して下さい。
※３　本報告書はリーディングプログラムキャリアパス支援委員会で内容を確認します。その後、教務委員会で単位認定を受けることになります。

提出先：VETLOG

内線：9545　e-mail: leading@vetmed.hokudai.ac.jp